Nara Women's University

個人と社会の異質性とディシプリンの変容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-11-02 キーワード (Ja): ディシプリン, 人間性の二重性, 非個人性 キーワード (En): 作成者: 江頭,大蔵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5510

個人と社会の異質性とディシプリンの変容

江頭　大蔵

はじめに

デュルケームは現在でも、「社会を個人の外部に実体化している」という批判をしばしば受けている。これは社会学の研究対象として定義された「社会的事実」が、その外的指標として個人に対する外在性と拘束性によって特徴づけられ、また「物のように」観察されるべきだと規定されているからであろう。当時からあるこの批判に対してはデュルケーム自身も敏感に反応し、『社会学的方法の規準』第２版への序文(1901)では、「諸個人のみが社会における能動的な要素である」ことを認めつつ、諸要素の結合によって形成された全体がもつ特性としての外在性と拘束性をもつ行為様式を「制度 institution」と呼び換える。そして「社会学は、諸制度およびその発生と機能に関する科学と定義される」と表明して批判に反論している。また、『教育と社会学』(1922: 57-8=1976: 67)では、「社会と個人という２つの項は対立し、一方が他方と逆の方向でのみ発達しうるというのではなくて、むしろ相互に他を包含しているのである。個人は社会を必要とし、社会は個人を必要とする。」と述べている。

デュルケームはさらに、社会が個人を超越していると同時に個人に内在的であるのは、社会が個人の中で個人を通してしか生きることができないからである(1924: 74=1985: 78)として、個人と社会が相互浸透の関係にあることにしばしば言及している。しかしその一方で、デュルケームの社会学は個人行為者の役割を重視してこれを社会学理論の中に組み込む方向へは進まず、個人と社会の間にある「異質性」や、社会の「非個人性」もしくは「非人格性」(impersonnalité)を再三にわたって強調した。この個人と社会の「異質性」の観点は、行為と社会構造の接合に意を注ぐその後の社会理論[1)]によって引き継がれなかった発想であると思われるが、それはデュルケームの社会学においてはそのディシプリン成立過程において中心的な役割を果たしていた。

本稿では、個人と社会の関係が相互浸透的ではあるがそれでも異質的であるというデュルケームの発想が晩年において結実した「人間性の二元性」のテーゼ、およびそれまでの諸理論との関連を検討する。そして、個人と社会の「異質性」の強調によって社会学を心理学から差別化したデュルケームが、そのことを用いて他のディシプリンの内部に新しい社会学的研究領域を開発しようとしていたことを示したい。

1　人間性の二元性

個人と社会の異質性という視点は、デュルケーム晩年の「人間性の二元性」という考え方に行き着いた(1913=1998, 1914=1988)。まず、その発想を概観してみよう。いたるところで人間は根本的に異質な二つの存在からなるものと考えられてきた。それは、一方における肉体と他方における魂であり、死によって肉体が滅びた後も魂は別の世界で生き続けるとされるように、本質的に異なるものと受けとめられている。肉体が本質的に俗的なものと考えられているのに対し、魂はいたるところで神聖なものとされる。

また、人間の内面世界も、感覚と概念的思考、感覚的欲求と道徳性といった、相互に矛盾し、相互に否定し合う要素が併存して成り立っているとされる。すなわち、音や色彩の感覚は個別の身体に結びついていて切り離すことができないが、概念は集合体に共有され他者に伝達することができる。また、空腹や渇きを満足させる感覚的欲求は自分自身のためだけの利己的なものであるのに対し、道徳的活動は本来非個人的な目標を追求する無私のものである。これらの二側面は、本質的に異なるばかりでなく、しばしば葛藤しさえする。人間がもつこのような二元性はあらゆる文明において感じられており、プラトンがイデア論で魂と肉体の対立として検討するなど、以後西洋哲学の主要課題であった（ホモ・デュプレックス Homo duplex)。しかし、この二元性と二律背反がどこから生じているのかについては、哲学的検討においては従来明らかにされてこなかった。

デュルケームによると、人間が自らを二元的なものと感じるのは、純粋に個人的で個別の身体に直接関係するものと、集合体に起源をもち諸個人の内部に持ち込まれ浸透した社会的なものという、質的に異なる二つの存在によって人間性が構成されているからである。この場合、社会的なものの異質性は、集合意識の聖なる性質、すなわち個人意識が相互に孤立せず活発に作用し合うことによる総合に由来する。そこで、人間性の二元性は、聖と俗への諸事物の分割という宗教的原理の個別事例にすぎないとされる。人間性の二元性という考え方は、個人と社会の異質性の観点がデュルケームの宗教社会学理論によって彫琢されたものであるといえる。

『宗教生活の原初形態』(1912=2014)においてデュルケームは「現在知られているもっとも原始的でもっとも単純な宗教」であるオーストラリアのトーテミズムを手がかりに宗教と社会の本質に迫る。彼がそこで見いだしたのは、宗教的祭儀で人々が集合することによってもたらされる激情的な興奮状態であり、日常とは全く異質の集合的沸騰から人々が「聖なるもの」の感覚を得ていることである。聖という集合的理想の背後にある実在は社会であるけれども、人々は氏族のトーテムとなっている動植物やその記号という象徴をとおしてしか聖を表象することができない。しかし、聖の具現化が神ならば、神とは社会であり、宗教は社会が自らを意識するための象徴の体系にほかならない。

霊魂が神聖なのは、集合体から引き出される非人格的な力としてのマナが、各人の身体に応じて個別化したものだからである。道徳的権威が義務的・強制的性質をもっているのはそれが個人を超越した社会という集合体の産物であるからだということを、デュルケームは再三強調している。また、人間が論理的思考でもちいる概念（コンセプト）が一般性

をもつのは、それが集合体によって形成され彫琢されているからである。このように人間が自らのうちに取り入れている社会的なものは、神聖であり、集合的で超越的であるゆえに、その容器である俗なる肉体、孤立した感覚、利己的欲求とは相いれない性質を持つ。そして、人間は自らの内にある社会的なものと葛藤し、それに従うことで、自らを超越することができるとされた。一般に人格性を構成するとされる「霊魂」「道徳」「理性」は非人格的な集合体に由来することになる。『宗教生活の原初形態』の目次で示された「人格性の非人格的諸要素(éléments impersonnels de la personnalité)」(1912: 644=2014(下): 452)という逆説的な表現は、デュルケームの社会学でしばしば見られるとらえ方である。

俗なる現実を超越するという意味で、人間が自らのうちに取り入れた社会的なものは「理想」の性格をもつ。そして、俗なる現実の世界にもう一つ別の世界が重なるという点で、聖と同じ原理で理想は生まれる。文明が立脚している偉大な理想が構成されたのも、創造期や変革期といった沸騰期であった。社会は、自分自身について作りあげている理想によっても構成されているため、理想を創造することなしには、自らを創造し、再創造することができない。主意主義を通り越して理念主義に至ったとパーソンズが指摘したのは、デュルケームのこのような社会観でであった。

人間性の二元性という見方は、宗教理論の深化を通してデュルケームが到達した人間観であった。そして、その前提となっている個人的なものと社会的なものの異質性の主張は、社会学を制度的に確立しようとする、以下のような言説の文脈の中から現れたといえる。

2　『自殺論』における展開

自己本位的自殺からアノミー的自殺まで自殺の社会的諸原因を検討した第二編「社会的原因と社会的タイプ」に続く第三編「社会現象一般としての自殺について」の第一章と第二章には、「社会の象徴としての神」や「個人の聖性」など、その後の『宗教生活の原初形態』へといたるデュルケームの発想の萌芽がちりばめられている。そのなかでも第一章「自殺の社会的要素」の後半部は、前著の『社会学的方法の規準』(1895=1978)に対する批判への反論という性格ももっていた。そこでは、デュルケームが個人の外部に社会を実体化しているという批判に対して、諸個人が相互に結びつくことによって新しい思惟や感覚の様式が生じることが述べられ、したがって個人に内在する性質や傾向の延長で社会の性質を説明するのは無効であることが主張されている。

この主張はさらに、『自殺論』刊行翌年の 1898 年に『形而上学・道徳評論』誌に発表された「個人表象と集合表象」(1924=1985)において詳細に議論された[2)]。そこでデュルケームは、心的生活を構成する個人の記憶、すなわち個人表象が脳神経細胞の物理・化学的過程に還元できないことを論じ、同様の理由で集合表象は個人表象に還元できない、すなわち社会は個人に還元できないというロジックを展開する。これはいわゆる創発性の主張で

あるが、個人の心理をあつかう心理学のディシプリンとしての独立性を主張すると同時に、その際に用いた論理を利用して社会学が心理学とは別の独立した領域を研究するものであることを宣言しているのだ。

ところで、創発性の立場をもう一歩進めて、「社会的なものと個人的なものとのあいだの異質性(l’hétérogénéité du social et de l’individuel)」(1897: 353=1985: 393)や「個人的状態と社会的状態のあいだの異質性(l’hétérogénéité des états individuels et des états sociaux)」(ibid.: 360=401)といった表現で、個人と社会が相対立する傾向としてとらえられるのはこの頃（『自殺論』以降）からではないかと思われる。『規準』における指摘は、諸個人の結合によって創発した社会的事実とそのような結合の要素である個人では存在の水準が異なり不連続で区別すべきであることが指摘されるにとどまっている(1895: 9-10, 44-5, 103-5=1978: 59-61, 115-7, 208-212)。

『自殺論』で示されたように、社会によって異なる自殺率がそれぞれ比較的長期にわたって一定性を保つのは、個別の自殺の事例をこえた非個人的原因(cause impersonnelle)が作用しているからである。その原因とは各社会に固有の集合的傾向であり、自殺率に現に作用しているという意味で実在的な力ととらえなければならない。社会学が存立するとすれば、それは他の諸科学がまだ探究していない未知の世界の研究でしかありえない(1897: 349=1985: 389)とデュルケームが主張しているように、集合的力が個人には還元できない何物かをもつという意味で非個人的であることは、社会学がディシプリンとして成立する条件ということになる。しかもこの個人と社会の異質性は、二つの対立する力のはたらきとしてとらえられている。「一方は、集合体から発して個人をとらえようとする。他方は、個人から生まれて、前者の力に反発する。」(ibid.: 360=402)社会が個人に浸透して個人にうながす行為、たとえば宗教的義務として断食をしたり社会的義務として納税するという行為は、「われわれの個人的利益を目的とするのではなく、むしろ個人的利益の犠牲と剥奪によって成り立っている。」(ibid.: 380=423)[3) 4)]

3　教育社会学（教育科学）の構想

デュルケームが 1887 年にボルドー大学に任用された際の肩書きは、社会科学および教育学の講師であり、1902 年にパリ大学に転じた際にも担当は教育科学であった。そのようなポジションを占めたことから、必ずしも本意ではなかったかもしれないが、彼の教育・研究において教育学関係の業績が占める割合は少なくない[5)]。したがって、社会の中で重要な機能を果たしている教育に関しても、デュルケームは社会学的研究方法を適用した。

デュルケームは「教育学(pédagogie)」と「教育科学(science de l'éducation)」を区別する。「教育学」が教育実践を指導する（あるべき姿を決定する）理論であるのに対し、「教育科学」は時代と社会によって多様に異なる「教育」という社会的事実を、その発生(genèse)

と機能作用(fonctionnement)の面から探究する科学である（1922: 69-79=1976: 84-98)[6]。後者の立場から、「教育とは、社会生活においてまだ成熟していない世代に対して成人世代によって行使される作用である。教育の目的は子どもに対して全体としての政治社会が、また子どもがとくに予定されている特殊的環境が要求する一定の肉体的、知的および道徳的状態を子どもの中に発現させ、発達させることである。」(ibid.: 51=58)という定義がなされた。各社会は、人間はどうあるべきかについての一定の理想を作りあげ、教育の作用によってこれを若い世代に実現しようとする。この理想はある程度までは社会の構成員にとって同一であるが(共通教育)、ある点を超えると分化して社会内の特殊な環境に対応する(専門教育)。

教育という社会現象についてのデュルケームのこうした社会学的理解は、社会化の主体を学校制度において行使される権威に限定しているという点で批判を受ける(Lukes 1973: 131-6)にしても、前述した社会における理想の役割、個人と社会の異質性、そして人間性の二重性という考え方と、非常に整合的である。彼によれば、人間は抽象によってのみ分離することができる２つの存在からなる。ひとつは、個人的存在、すなわちわれわれ自身、われわれの個人的生活の事件のみに関係しているすべての心的状態から作られているものである。そしてもうひとつは、社会的存在、すなわちわれわれのパーソナリティではなく、われわれが所属している集団もしくは種々の集団を表明している観念、感情および慣習の体系である。教育は若い世代の体系的社会化であり、その目的はこのような社会的存在を形成することである(1922: 51=1976: 59)。「…教育の目的は生まれたときの個人的また反社会的存在の上に、１つの全く新しい存在を添加することにある。すなわち、教育は、われわれをしてわれわれの本来の性質を乗り越えるようにさせなければならない。」(ibid.: 66=79)

このように人間性の二重性は、生来個人的存在である人間に、教育の作用によって社会的存在が付加された結果であり、そのことによって社会は自己を更新できるとされた。そして、このような理解によってデュルケームは、教育学に対して社会学が心理学とは別の側面から貢献できることを論じる。人間の生得的能力をいかに伸ばすかだけが問題であれば、教育を個人的事象としてとらえ、教育学を心理学から直接導かれる系とすることもできる。しかし、教育がわれわれの内部に実現すべき人間、すなわち教育理想は、時代や社会が変わるに応じて変化する社会的存在のあり方に依存している。教育制度がどうあるべきかを理解するためには教育理想とそれが対応する社会状態を結びつけることが必要であり、心理学のみではこのことはなしえない(ibid.: 91-112=113-141)。デュルケームはこのように主張することで、心理学とは別の独立したアプローチによって、教育学の研究領域に社会学的な探究の分野が成り立つことを示そうとした。

4　道徳理論と社会学――もうひとつの二元論

デュルケームはその学問的キャリアの初期から最晩年に至るまで、道徳とその科学的研究に強い関心をいだいていた。しかも彼の道徳理論は、その発展の過程において、中期の『自殺論』において自殺率の増減を説明するために展開された「統合」と「規制」の理論と、後期の『宗教生活の原初形態』における「聖－俗」理論とを媒介する位置を占めるようになっていた(江頭 2007)。この自殺理論－道徳理論－宗教理論の、いわば変形過程の中軸には、相互に異質な個人的なものと社会的なものの二元論とはまた別の二元論を見て取ることができる。

「道徳的事実の決定」(1906)においてデュルケームは、道徳的事実（道徳的準則）は「義務・強制的性質」と「善・望ましいもの」という相矛盾する性質を備えており、その点で神聖なものと通底していることを指摘する。「純粋に義務によってのみ遂行される［道徳的］行為なるものは決して存在しない。それは常に何か善きものとして現れなければならなかった。逆に純粋に望ましいという性質だけのものもおそらく存在しない。なぜなら、それらは常に努力を必要とするからである。」(1924: 63=1985: 66)このように「義務」と「善」は、道徳性の強制的・拘束的な側面と望ましく魅力的な側面を示しており、異質で相対立する傾向である。権威によって強制されるのと、自発的に惹きつけられるというのでは、対象に対する態度としては正反対である[7)]。

この「義務」と「善」という道徳的事実の性質の背後には個人と社会の相互浸透性という状況がある。社会は個人との関係では超越的であると同時に内在的である。社会が諸個人の結合によってその総和を超えた性質をもっているとすれば、社会は諸個人に優越し超越的・外在的であるので諸個人に命令する。しかしその反面、社会は諸個人の中で諸個人を通してしか存続できないので、われわれの内部に浸透し、われわれの存在の一部を、しかも最良の部分を構成するため、われわれは社会を進んで希求する(1924: 74, 76-77=1985: 78, 81-8; 1925: 83-84, 88-89=1964(1): 134-41)[8)]。このように道徳的事実の二重の性質は、社会の集合的構成によって説明される。

このような社会的なものの二元論と折り重なり、個人と社会の異質的二元論は展開される。上記の道徳的事実のように従来哲学的に考察されてきた価値に関する論考を次に見てみよう。

聖なるものの分析にも通じるように[9)]、デュルケームは物自体はそのものでは価値をもっているわけではなく、価値というのは世論の産物であり、意識状態との関係でしか物は価値を持つことができないと考える(1924: 77=1985: 82)。そして、個人的な愛着とは別に、他者との意見の一致を想定する客観的な価値判断も存在する。例えば、個人的には宝石に全く価値を認めないとしても、社会的には宝石に価値があることには何の変わりもない。これは、価値判断においては、集合的に形成された「理想」との関係で物事が判断されるからである（「価値判断と現実判断」(1911)）。集合的に形成された理想は、それにもとづいて判断を下す個々人の意思を超えた非個人的な(impersonnel)ものとしてとらえられた

(ibid.: 117=128)。

「人間性の二重性」についての考察にもあてはまることであるが、『社会学と哲学』(1924)に掲載された諸論文について、セレスタン・ブーグレは同書序文で、「これらの論文はどの方向に、またどの程度社会学が哲学を更新するかを示している。」と記している。また、デュルケーム自身もそこに収められた「価値判断と現実判断」(1911)において、「いかにして社会学が哲学上の問題の解決を助けうるかを個別事例にもとづいて示す」ことをこの論考の目的の一つとしている。道徳性の義務と善の性質、価値判断はいかにして可能か、等々従来哲学的に考察されてきた諸問題についても、デュルケームは個人とは異質の社会の集合性の観点から、社会学的に研究されるべき領域を切り開こうとしていたといえるのではないか。

5　歴史学への接近と批判

ベラー(Bellah 1959)がいち早く指摘しているように、デュルケームの社会学的研究のほとんどすべてにおいて、歴史的次元が基本的要素となっている。『社会学的方法の規準』(1895: 132=1978: 251-2)、『自殺論』第1版序文(1975 Vol.I: 45)、『社会学年報』創刊号序文(1898)などの重要文献において、社会学的研究の素材の供給源として歴史学を筆頭に取り上げ（その他の補助学問としては民族誌――『宗教生活の原初形態』に対応――と統計学――『自殺論』に対応――を指摘している)、歴史学と社会学とは融合することが望ましいとまで述べている。そして、この歴史学への接近のしかたについても、個人的なものと社会的なものの間にある断絶の観点が反映しているようである。

デュルケームにとって歴史的次元が重要視されるのは、それが社会学における説明の論理と密接に結びついているからである(江頭 2006)。『規準』第五章「社会的事実の説明にかんする諸規準」の冒頭では、社会現象や社会制度をそれがもっている有用性によって説明する思考法、すなわち目的論的説明についての批判が展開される(1895: 90=1978: 188-9)。ある社会現象を説明しようとする場合、それを生みだす作動因(cause efficiente)とそれが果たす機能(fonction)とは別々に探求されなければならない(ibid.: 95=196)。作動因としてデュルケームが重視するのは、内的社会環境の構成(la constitution du milieu social interne)（社会的諸単位の数、社会の容積、人びとの集中化の程度、もしくは動的密度など）(ibid.: 111-2=221-2)と歴史的過去(1953: 108-9=1975:70-1)である（Bellah 1959:449-50 も参照)。多少とも複雑な社会制度は、その構成要素を歴史的に積み重ねてきており、その発生の過程を歴史のなかでたどることによってしか理解することができない(1908a: 59, 1909=1988 も参照)。このような社会的事実の歴史性は、それが非個人的で集合的なものだからこそ個々人の生死を超え過去から未来へと引き継がれるということが前提となっているだろう。

歴史的研究の重要性を強調するその一方で、従来の歴史学における研究方法に対してデ

ュルケームは一貫して厳しい批判を加えていた。再現することのない具体的事件・出来事を年代順に記述することに自らの研究を限定する歴史学の態度に対し、歴史的諸事実の比較によって諸現象間の安定的関係＝法則を見いだすことを強く提言する(1888: 81=1988 :65; 1895: 76=1978: 167; 1900a: 117=1988: 94; 1900b: 34-5=1975: 250-1)。伝統的歴史学とデュルケームの見解の対立は、歴史的現実をどのような位相でとらえるのかについての認識の相違に由来している。このことは、主に歴史学者セニョーボスと論戦を交わした討論の記録(1908b)において見ることができる。セニョーボスは歴史学を個別的出来事の継起の研究と考え、出来事の原因を第一に当事者や目撃者の主観的動機や解釈に求める。これに対してデュルケームは、社会のより深層に存在する「機能、制度、固定化し組織化された行動様式」について、歴史的比較によって法則的な相互連関を確立することが可能であるとする(ibid.: 212-3)。セニョーボスがもっぱら「歴史的事件」のレベルで、当事者の動機の解釈や個別的出来事の時間的な序列を因果関係としてとらえているのに対し（「私は単に、事件、一度しか生じることのない歴史的事件についてはなしているのです。」）、デュルケームはより永続的な制度や社会的機能（「宗教的禁止や古代ローマの家父長権のような現象」）のレベルでの因果関係を問題にし、それを成立させる要因を問題とした(ibid.: 201)。

出来事から制度へという研究焦点の移動は後にアナール学派にも受け継がれた。出来事と制度というこの区別は、個々別々の個人的なものと、集合的であるがゆえに一般性をもつ社会的なものとの間の差異に対応しているだろう。デュルケームは『社会学年報』の書評の対象からは、もっぱら歴史的個性や個別的出来事のみを対象とする研究を取り除いた。それは「個々の有機体の個体がその生存過程で経験した突発事についてのうわべの歴史について、生物学者が大きな関心を払わない」ことと同じ理由による(1898: 35)。というのは、科学としての社会学は個人的・偶然的要素の影響を排除して、諸現象間の安定的関係を引き出さなければならないと彼が考えたからである。このような立場がシミアン（Simiand 1903）とともに歴史学に影響をおよぼし、後のアナール学派が比較法を用いた法則定立的探求を歴史研究に導入したとすれば、これも歴史学というディシプリンへ社会学が浸透していった事例と言えるだろう。

おわりに

「個人的存在と社会的存在の異質性」（社会的存在の非個人性・非人格性）の強調は、従来の科学では取り扱ってこなかった集合的現象の独自性を示すものであり（ディシプリン化）、とりわけ心理学からの差別化を意味していた。これは、社会が心理的現象を土台としていることをデュルケームが強く意識していたからこそであっただろう。そして、心理学との差別化を果たすと同時に、デュルケームは他の既存の諸ディシプリンとの差異を主張

するどころか、自殺研究、教育学、道徳理論（倫理学)、歴史学、宗教学、そして哲学に及ぶまで、その内部に新しい社会学的研究の領域を浸透させようともしていた。この側面は「社会学帝国主義」と批判されているところでもある。

歴史学との関係では、アナール学派が比較法を用いた法則定立的探求を歴史研究に導入した側面はデュルケーム社会学と重なり合い、相互浸透している活動領域とみなしてよいであろう。しかしながら、「社会学帝国主義」と周囲から警戒される外交戦略をデュルケーム派がとってきたという状況においては、現実にその活動領域が相互浸透しているという事態は、歴史学が社会学にたいして一定の距離を置く方向へと作用した。

多様なディシプリンに浸透していった社会学的研究領域は、○○社会学のような連字符社会学と呼ばれる。一般社会学の原理のもとに一連の連字符社会学が体系化されることが望ましいのかもしれないが、現実にはどうなっているだろうか。帝国主義への警戒から一定の距離を置かれる、もしくは既存のディシプリンに再吸収されて一般社会学との結びつきが薄れるということも、社会学のディシプリンが不明確化する背景をなしているのではないだろうか。

デュルケームは、個人とは異質の社会の集合的性質を社会学的説明の核とすることにより、既存のディシプリンの内部に、おそらくは反発を受けるほどに「新しい見方」を持ち込もうとしていた。社会学の研究領域が他のディシプリンと重なり合うことが避けられないとすれば、そのディシプリンに対していかにして新しい視点を提供し続けることができるかが、社会学の存在意義を主張する根拠になるのではないだろうか。

［注］

１）　後世のデュルケーム解釈に大きな影響をおよぼした理論家としてはパーソンズとギデンズがあげられるだろう。パーソンズ(Parsons 1937=1982, 1960, 1968)は、デュルケームの理論が実証主義から主意主義を経て理念主義へと変遷してきたことを示し、社会科学諸理論の主意主義への収斂を主張した。そのデュルケーム解釈は、後年その「読み誤り」について厳しい批判を受けることになる(Pope 1973, Giddens 1972)が、それはデュルケーム社会学の行為論的修正とも受け取ることができる。たとえば、共通の信念と感情という意味での集合意識の概念が機能分化した社会の連帯や統合を分析するには一般的すぎるとして、社会的価値・規範・集合体の目標・役割期待という４つの水準を区別し、行為者個人の動機付けの問題を扱えるように修正する(Parsons 1960: 121-125)。また、自殺類型論における自己本位主義と集団本位主義の区別を内面化された価値や規範の内容の違いとして解釈し、「外在性と拘束性」の図式では解決できない価値・規範の内面化の問題をあつかえるようになったと解釈する(ibid.: 142)。ギデンズについては後述する。

２）　同論考が『社会学的方法の規準』に対する諸批判への一連の反論の延長線上にあることは、その結論部において諸個人の結合から社会の新しい性質が生じることを論じる

際に、『自殺論』第三編第一章の第三節（前述の反論部分）の参照を示している(1924: 40, n.2 = 1985: 50, 注(16)）ことからも見て取れる。

３） Pope(1973: 413)によると、「個人と社会が類似していて、社会現象を個人によって説明できればできるほど、独立科学としての社会学の主張は説得力を失う。もし個人的な力と社会的な力が異なっていれば、否むしろ対立するものであれば、所与の効果が個人的力に帰せられるべきか、社会的力に帰せられるべきかは明確になる。そこでデュルケームは個人的なものと社会的なもの根本的な異質性を強調した。…この文脈において、社会的諸力が個人を拘束する様式がその現実性の証拠となるという彼の主張が最もよく理解できるものとなる。」

４） ギデンズ(Giddens 1965a, 1965b, 1966)は比較的若い時期から『自殺論』や自殺研究に関心を寄せ、その背景を深く掘り下げている。ギデンズ(1965b)によると、『自殺論』で示された自殺と社会的要因との様々な関係（プロテスタントとカトリック、性別、婚姻上の地位、急激な社会変動…等々）は当時すでに周知のものであった。『自殺論』の決定的な前進は、以前の発見を一貫した社会学理論によって説明したこと：個人の自殺の心理学に関する問題から明確に切り離し、自殺率の分布を「社会構造」的要因（自己本位主義、集団本位主義、アノミー）によって説明したことである。

デュルケームの死後、自立的ディシプリンとしての社会学の立場と、それに対抗する心理学・精神医学の立場の論者との間で、自殺の原因が「社会的」か「心理的・生物学的」かをめぐる論争が展開された。この論争は、自殺が「根本的には」「社会的」現象か「個人的」現象かという、デュルケームータルド論争の文脈の上に構築されたものだが、これは誤って立てられた「疑似問題」（ギュルヴィッチ）のひとつで、実際には個人と社会の間には常に「相互依存関係(reciprocity)」がある。

そこでギデンズ(1966)は、「デュルケームが想定した自殺率を規定する構造的変数は、自殺的パーソナリティの形成と分布に影響する変数と分離することはできない」との立場から、社会構造の問題が直接自殺率に影響するだけでなく、社会化の過程でパーソナリティの形成にも影響するという理論モデルを考案し、フロイトの精神分析（超自我、自我理想）を援用して自己本位的自殺とアノミー的自殺の心理学的特徴を描き出す。その背景には、「パーソナリティと社会構造の間の緊密で複雑な相互依存」という構造化理論につながる発想があり、個人的なものと社会的なものの異質性や対立を重視する視点は捨象されてしまった。

５） Lukes(1973: 626ff.)の付録Ａ（デュルケームがボルドー大学とパリ大学で担当した講義の一覧）によると、その大学におけるキャリアのほぼすべての年で、デュルケームは教育や教育学に関する講義を担当している。

６） デュルケームは教育学に対する遠慮からか教育社会学という用語を使うのを控えているようにも思えるが、本稿冒頭で示した彼の社会学の定義（諸制度およびその発生と機能に関する科学）に照らし合わせれば、教育科学は教育という社会制度を対象とした社

会学にほかならないことになる。

7）　「聖なるもの」についても同様の矛盾を見て取ることができる。一方で、聖は俗的存在との接触を禁止された畏怖の対象である。他方で、それは俗なる信者が接近し一体化を目指す愛と願望の対象でもある。「すべての聖なる存在は、みずからに刻印された特質のゆえに、俗なるものの侵害から免れている。しかし他方でそれらの存在は、当の信徒たち――反面では、これらの存在から丁重に遠ざけられていなければならない――と関係しなければ、なんの役にも立たず、存在理由をまったく欠くことになってしまう。結局のところ、真の涜聖とならないような積極的儀礼は存在しない。というのも人間は、通常、自分を聖なる存在から分離しているはずの障壁を乗り越えることなしには、これと交流することができないからである。」(1912: 483=2014(下): 219)

8）　「道徳的事実のこの二つの特性…それは集合的現実という同一の現実の二つの側面にほかならない。社会が我々に命令するのは社会が我々に外在的で、かつ我々に優越しているからである。…しかし他方、社会は我々に内在的で、我々の内部に存在し、我々自身であるので、かかるものとして我々は社会を愛し、社会を欲し、しかも特殊な欲望をもって欲する。」(1924: 76-7=1985: 81)

9）　トーテムの神聖さは、トーテムとして用いられる事物の性質から来るものではない。トカゲ、芋虫、蟻、カエルなど、それらはしばしば取るに足りないものである。これらの事物は図像化され、氏族の名と記号となっているため、氏族社会に由来する神聖さの象徴として機能する。(1912=2014（下)、第二編第七章)

［文献］

Bellah, R. N., 1959, “Durkheim and history,” *American Sociological Review*, 24(4).

Durkheim, É., 1888, “Cours de science sociale: leçon d'ouverture,” in 1970, *La Sience sociale et l'action*. （=1988, 佐々木交賢・中嶋明勲訳「社会科学講義」『社会科学と行動』恒星社厚生閣、所収.）

————,1895, *Les Règles de la méthode sociologique*, 21e édition, Press Universitaires de France, 1983.（=1978, 宮島　喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫.）

————,1897, *Le suicide: étude de sociologique*; Nouvell édition, Press Universitaires de France, 1983.（=1985, 宮島　喬訳『自殺論』中公文庫.）

————,1898, “Préface de *L'Année sociologique*, vol. I”, in 1969, *Journal Sociologique*.

————,1900a, “La Sociologie en France au XIXe siècle”, in 1970, *La Sience sociale et l'action*. （=1988, 佐々木交賢・中嶋明勲訳「一九世紀におけるフランスの社会学」『社会科学と行動』恒星社厚生閣、所収.）

————,1900b, “La sociologie et son domaine scientifique(La socilogia ed il suo dominio

scientifico)", in 1975, Textes, vol. I.（=1975, 小関藤一郎・川喜多喬訳、「社会学とその学問的領域」『モンテスキューとルソー　社会学の先駆者たち』法政大学出版局、所収.）

————,1908a, "Contribution to 'Enquête sur la sociologie", Les *Documents du progrès*, 2e année, février, in 1975, *Textes*, Vol. I [Remarque sur la méthode en sociology].

————,1908b, "Interventions à la discussion du 28 mai 1908 sur 'L'inconnu et l'inconscient en histoire", *Bulletin de la sociétéfrançaise de philosophie*, 6, , in 1975, *Textes*, Vol. I [Débat sur l'explication en histoire et en sociologie].

————,1909, "Sociologie et sciences sociales", in 1970, *La Sience sociale et l'action*.（=1988, 佐々木交賢・中嶋明勲訳「社会学と社会諸科学」『社会科学と行動』恒星社厚生閣、所収.）

————,1912, *Les Formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémiqueen Australie*; 7e édition, Press Universitaires de France, 1985.（=2014, 山崎亮訳『宗教生活の基本形態　オーストラリアにおけるトーテム体系』(上・下)』ちくま学芸文庫.）

————, 1913, "Le problème religieux et la dualité de la nature humaine", *Bulletin de la Société française de philosophie*, 13, in 1975, *Textes*, Vol. Ⅱ.（=1998, 小関藤一郎訳「宗教問題と人間の二元性」『デュルケーム宗教社会学論集』行路社、所収.）

————,1914, "Le dualisme de la nature humaine et ses conditions sociales", *Scientia*, XV, in 1970, *La Sience sociale et l'action*.（=1988, 佐々木交賢・中嶋明勲訳「人間性の二元性とその社会的諸条件」『社会科学と行動』恒星社厚生閣、所収.）

————,1922, *Education et eociologie*; 7e édition, Press Universitaires de France, 1999.（=1976, 佐々木交賢訳『教育と社会学』誠信書房.）

————,1924, *Socilogie et philosophie*; Nouvell édition, Press Universitaires de France, 1974.（=1985, 佐々木交賢訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣.）

————,1925, *L'Éducation morale*; Nouvell édition, Press Universitaires de France, 1974.（=1964, 麻生　誠・山村　健訳『道徳教育論』（１・２）明治図書.）

————,1953, *Montesquieu et Rousseau, précurseurs de la sociologie*, Librairie Marcel Rivière et Cie.（=1975, 小関藤一郎・川喜多喬訳『モンテスキューとルソー　社会学の先駆者たち』法政大学出版局.）

————,1969, *Journal Sociologique*, Press Universitaires de France.

————,1970, *La Science sociale et l'action*, Press Universitaires de France.（=1988, 佐々木交賢・中嶋明勲訳『社会科学と行動』恒星社厚生閣.）

————,1975, *Émile Durkheim: Textes*, vol. Ⅰ, Ⅱ, Les Éditions de Minuit.

江頭大蔵 , 2006, 「デュルケームと歴史的方法――その理論構成における位置づけ」『広島法学』30(2): 1-26.

————, 2007, 「デュルケーム道徳論における「義務」と「善」の関係について」『広島

法学』31(2): 21-42.

Giddens, A., 1965a, "Theoretical problems in the sociology of suicide," *Advancement of science*, XXI: 522-526.

————,1965b, "The Suicide Problem in French Sociology," *British Journal of Sociology*, 16(1): 3-18.〔Giddens(1977)に再録〕

————,1966, "A typology of suicide," *Archives européennes sociologie:European Journal of Sociology*, 7(2): 276-295.〔全面改定して Giddens(1977)に再録〕

———, 1972, "Introduction: Durkheim's writings in sociology and social philosophy," Giddens, A. (ed.), *Emile Durkheim: selected writings*, Cambridge University Press, 1-50.

————,1977, *Studies in Social and Political Theory*, Basic Books. (=1986, 宮島　喬ほか訳,『社会理論の現代像』みすず書房.)

Lukes, S, 1973, *Émile Durkheim His Life and Work: A Historical and Critical Study*, Penguin Books, 1992.

Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action*, The Free Press.(=1982, 稲上　毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造 3 デュルケーム論』木鐸社.)

————,1960, "Durkheim's contribution to the theory of integration of social system", Wolff, E. K. H.(ed.), *Emile Durkheim, 1858-1917*, Ohio State University Press.

————,1968, "Durkheim, Emile," *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol.3: 311-20.

Pope, W., 1973, "Classic on Classic: Parsons' Interpretation of Durkheim," *American Sociological Review*, 38(4): 399-415.

Simiand, F., 1903, "Méthode historique et science sociale: Etude critique d'après ouvrages récents de M. Lacombe et de M, Segnobos," *Revue de synthèse historique*, vol. 6, repr. in Simiand, F., *Méthode sociologique et sciences sociales*, Gordon and Breach Science Publishers S.A., 1987.

（えがしら　だいぞう　広島大学教授）